秋山綾子<sup>1</sup>: 報告—第 33 回日本植生史学会談話会 Ayako Akiyama<sup>1</sup>: Report—The 33rd forum of the Japanese Association of Historical Botany

第33回日本植生史学会談話会「下北半島猿ケ森砂丘のヒバ埋没林」が11月6日から11月7日にかけて青森県東通村にて行われた。今回の談話会は、第26回日本植生史学会大会に続いて開催され、公開シンポジウム「ヒバ、五千年の歴史と文化」とも対応していた。

青森県下北半島北東岸の猿ケ森地域は、ヒバ(本稿では ヒノキアスナロの林学上の呼称であるヒバに統一して用い る)埋没林が見られることで知られている。猿ケ森の埋没 林は下北半島の古環境、そして当時のヒバ林の生態を知る ための重要な手掛かりを残す場所である。私自身樹種同定 の勉強をしており、埋没林の実態とその環境復元に興味が あったので今回の談話会に参加した。本巡検は、猿ケ森川 流域のヒバ埋没林を観察し、ヒバの生態と歴史について議 論することを目的に開催された。

11月6日植生史学会終了後,車に分乗して会場の弘前大学を出発し,宿泊地である青森県野辺地町の馬門温泉富士家ホテルを目指した。夕飯はホタテやイカなどの青森の海の幸を中心に様々な料理を堪能した。夕食の途中,世話人の箱崎真隆氏に,翌日の見学コースと猿ケ森のヒバ埋没林についてスライドを用いた説明をしていただいた。

11月7日は8時30分にホテルを出発し、最初に冷水峠にて現生のヒバ林を観察した。冷水峠は東通村とむつ市の

境界に位置し、標高 248 m である。この峠の周辺にのみ 200~400 年生のヒバ林が分布し、その他の場所の大部 分はスギの植林とミズナラの二次林で構成されている。同 峠周辺は下北森林管理署の管轄であり、現在伐採等は行われていない為、この峠の一帯はヒバの天然分布域とみなされている。初めて見るヒバ林は幹が大きくねじれていたり、たくさんの枝を伸ばしている大木ばかりで、冷涼な地域で生きる木々の生命力を感じさせた(図 1)。下北半島のヒバは、近世には「南部桧」と呼ばれ、北陸地方や江戸に流通していたそうだ。南部藩の貴重な財源ということで、厳しい伐採制限の他、「一伐五栽」の植林制度も設けられていた。冷水峠のヒバ林もこの制度によって現在まで保存されてきたと知り、下北半島の人々が如何にヒバを大切に扱ってきたかを実感することができた。

その後、猿ケ森埋没林に向かった。猿ヶ森地区は太平洋に向かって緩やかに傾斜する低地である。現在の植生としてはアカマツ林、ミズナラーコナラ林、ヤチハンノキ林が見られ、冷水峠のようなヒバの現生林は見られない。箱崎氏による埋没林の成因の説明を受けた後、埋没林の中を散策した。砂丘に埋もれているこの埋没林は東通村教育委員会の調査によれば、183本のヒバで構成され、直径50cm以上の個体も38本含む(図2)。中でも最大のものは直径113cmであるとのことだった。遊歩道を進んでいくと沢沿いに数々の埋没木を確認することができた。これらの埋没木に関しては、年輪年代学的な研究と放射性炭素年代測定が行われている。それらの結果から、猿ケ森の埋没林



図1 冷水峠のヒバ林.



図2 猿ケ森の埋没林.

は 970 cal AD 以前には少なくともこの地に定着しており、 1300-1350 cal AD 頃に枯死したと考えられている。

散策の終点付近の沢で白頭山-苫小牧火山灰が観察できた(図3)。白頭山-苫小牧火山灰は泥炭層に挟まれており、ヒバ埋没木はこの泥炭層に含まれる。またその上部には砂層が観察できた。泥炭層中にヒバの球果が検出される可能性がある為、土壌サンプルを採取している方もおられた。

全ての見学を終えた後、埋没林の入口の広場で、全員でお弁当をいただいた(図 4)。時折雨に見舞われ、あいにくの天気であったが、森の中で食べる昼食はおいしかった。

今回の巡検に参加し、ヒバと下北半島の人々との関係、 猿ケ森の埋没林について、実際に現地で見学することで より深く理解することができた。海岸沿いの低地に、どの ようにヒバの森林が広がっていたのか本当に不思議である。 末筆ではございますが、今回の談話会を計画し、準備して 頂きました箱崎真隆氏(東北大学)と伊藤由美子氏(青森 県郷土館)に心より感謝申し上げます。

(<sup>1</sup> 〒 980-0874 宮城県仙台市青葉区川内 27-1 東北大学大学 院文学研究科歴史科学専攻考古学専攻分野)



図3 露頭について説明する世話人の箱崎氏 (左).



図 4 参加者集合写真(写真提供:高原光氏).